



精霊地界物語 4

---

山梨ネコ  
Neko Yamanashi

RB

レジーナ文庫



登場人物  
紹介

フィン ▶

貧民街の孤児たちをまとめる青年。エリーゼとは幼馴染で、報酬に応じて様々な依頼を引き受けている。

ステファン

エリーゼの兄で、現勇者。幼女の姿をした精霊のアカとクロを従えている。

エイブリー

エリーゼの兄で、王宮の騎士。真面目だが、半分魔族なので考え方がズれている。

▲タイタリス

アールジス王国の第一王子。自身の精霊の呪いを解くため、エリーゼを正妃候補にしたけれど……？

▶デザイトス ▲

高慢で我儘な貴族の青年。古い魔法に守られた屋敷を所有している。

エリーゼ ▲

異世界に転生した元・女子高生。伝説の勇者だった母と、魔族の父の間に生まれた。「精霊の呪い」と呼ばれるものを解こうと奮闘している。

ディータ ▲

騎士見習い。エイブリーに命じられてエリーゼの護衛をしている。

シーザ ▲

エリーゼの侍女。いつか玉の輿に乗ることを夢見ている。

▲リール

エリーゼの弟で、天才魔法使い。毒舌だが姉思いのツンデレ。どうやら父と同じ魔族であるらしい。

目次

精霊地界物語 4

書き下ろし番外編 魔法使いの卵たち

361

7

精靈地界物語 4

## 第一章 新しいクエスト

「姉さん！ 無事でしたか……！」

冒険者ギルドに到着したエリーゼに、弟のルールが駆け寄ってくる。ルールの顔を見たエリーゼは、ほっとして肩の力を抜いた。

けれど、先程の出来事を思い出すだけで身体に震えが走る。

——傲慢な貴族デザイトスの屋敷で飼われていた魔物が、突如変質した。その邪悪な魔物を始末したエリーゼの足下に謎の魔法陣が出現し、エリーゼは理からの逸脱を果たしたのだ。

それが何かはわからないが、魔物から受けた傷は瞬く間に治癒し、全ての細胞が生まれ変わった気がした。自分の身体を構成する一粒一粒の組織が激変するかのような感覚は、ほとんど快楽に近かった……

ギルドマスターがエリーゼとルール、騎士見習いのデーターを奥の部屋に案内した。

四人でソファに座り、エリーゼが己の身に起きたことを説明すると、ギルドマスターがこんなことを言う。

「それは、お嬢ちゃん自身のイメージが具現化しただけじゃねえか？ お嬢ちゃんが魔法を使った後、魔法陣が現れたんだろ？ それは何かに似ていなかったか？」

「……ステファンの精霊に力を貸し与えられて、精霊魔法を使った時の魔法陣に似てたかも」

「その記憶が強烈すぎて、お嬢ちゃんの魔法に対するイメージが、それで固まったんだ。よくあることだぞ。見てくれは派手なのに大して効果がない魔法を使うヤツがたまにいるが、大体使い手の師匠が偉大すぎたのが原因だろう」

それは違う、とエリーゼは思った。ギルドマスターに侮られたのが悔しかったから、そう思ったわけじゃない。

エリーゼの魔法陣には、理からの逸脱と書かれていた。エリーゼの肌が、細胞が——そして魂が、その現象を確かに体験している。

「……レベルアップって、わかります？」

エリーゼがそう尋ねると、ギルドマスターはエリーゼを憐れむような顔をした。

「そうか、お嬢ちゃんは自分の兄貴が勇者になる瞬間を見たんだっただな。あれは強烈

だったろうし、お嬢ちゃん<sup>お嬢</sup>が憧れるのも無理はない。だが、あれは勇者だからできたことだ。レベルアップっていうのは、精霊が特別な人間にしか許さない、魂の越境——つまり、人の理<sup>ことわり</sup>を超えた生き物になるってことだからな。とはいえ、勇者に選ばれなくとも人間から別の生き物になった例はある。魔女だとか、半妖精だとか、竜人だとか。……まあ、興味があるならジルクリスタ学術学問同盟のアーハザンタス支部に文献があるから、見てみるといい。紹介状なら書いてやる」

どうやら色々と誤解しているらしいギルドマスターに、エリーゼは戸惑う。

「あの、ギルドマスター？」

「お前の兄は勇者になったが、お前はその妹でしかないぞ。古代屋語<sup>ルン</sup>が使えるから賢者と呼ばれることはあるかもしれんが、存在そのものが賢者になることは方に一つもないだろう」

「ステファンは、存在そのものが——勇者になったの？」

「そういうことだな」

じゃあ、と口にしかけて、エリーゼはその言葉を吞み込んだ。

（私はどんな存在になったの？）

エリーゼはギルドカードを取り出し、自分にしか見えないように情報を展開する。

名前……エリーゼ・アラルド・ハイワーズ

性別……女

年齢……15歳

職業……冒険者 サファイリディア

種族……人間

所持金……白銀貨29枚 銀貨35枚 銅貨21枚

恩恵<sup>ギフト</sup>……【気配察知】C 【逃げ足】D 【警星】B 【美貌に弱い】【胃弱】【勇者の妹】

加護……松？？？の霊魂

▼精霊クエスト

（恩恵に、勇者の妹っていうのが加わってる）

だが、それはレベルアップする前からだ。勇者の妹と書かれているだけで、それが何なのかはわからない——はずだった。

（あ、れ——？）

指で触れていると、さらなる情報が展開された。

【勇者の妹】という文字の下に、「勇者の妹 Lv.1」という文字が出現する。  
(レベルが0から1になった……?)

それがどういふことなのか、説明は書かれていない。だが展開された立体映像を指でなぞると、精霊クエストが表示された。

その内容を確認して、エリーゼは目を見開く。

・レベルを上げよう!

上位世界からの転生者である、あなたへお願い。

レベルを上げて。

上げないと、キミも死んじゃうよ。

しかも、キミ『も』ということとは――

(私が死んだら、エシユテスリーカも死んじゃうの?)

《――エシユテスリーカ――》

虚空こくうに向かつて古代魔語ルクトで語りかけるエリーゼを見て、何か言おうとするデーターを、ギルドマスターが手で制す。

リールがソファから腰を浮かせるのと同時に、エリーゼの耳に電波状態の悪いラジオのような音声おとが、耳鳴りと共に届いた。

『――ゼ? ――る?』

《――聞こえないよ――》

『――ぼくたちの会話を妨害する精霊がいるんだよ』

苛いらだたしげに言ったのは、金髪きんぱつの少年の姿をした精霊、エシユテスリーカだ。以前、トランプを奉納せよという精霊クエストを出してきた彼は、また新しいクエストをエリーゼに出した。

恐らくはエリーゼがこの世界で生き残るために、必要なクエストなのだろう。

『ぼくより若い精霊のくせに、ぼくよりこの世の理ことわりをわかった気である。それで、愚かにもこうしてぼくの邪魔まげをしてるんだ。その行動が世界の存続を危うくすることも知らないで! ぼくの方が古くから存在しているんだから、より遠くの未来を見通すことができるのは、当たり前なのに――若い精霊ほど、愚かなところばかり人間に似る。エリーゼ、ぼくの声は届いてるかな?』

「……届いてる」

エリーゼが普通の言葉でそう呟つぶやくと、リールが「なんですか?」と眉根を寄せた。だ

が、エリーゼはそれを黙殺する。生きるのに必要な情報を聞き漏らさないために。

「どうして」

エシユテスリーカはそのエリーゼの疑問に、滑らかな口調でこう答えた。

『どうしてかは教えてあげない。だけど、キミの——を上げて存在値を高める——が』  
 (私の「レベル」を上げて存在値を高める『こと』が?)

聞こえなかった部分を推測して補ったエリーゼに、エシユテスリーカは厳かに告げる。

『——世界を救うために必要なんだ』

ステファン一人じゃ世界を救えないの? と考え、救えないだろうなと思ってつい笑ってしまった。

世界を救わなくては、生きることさえできないのだとしたら——

(私が生きるため。そのついででよければやってあげる)

かつては勇者に選ばれて世界を救いたいと思っていたが、それを自分の使命と思うには、もう手遅れだった。

屋敷に戻ってきたエリーゼは、血のついた服を着替えながら、迷宮のある方角を見た。前世を平和な日本で過ごしたエリーゼにとって、この世界は生きるだけでも大変だ。

この国に根付いている宗教——精霊神教はエリーゼの中に流れる魔族の血を憎んでおり、彼らと敵対する悪魔信仰者たちはエリーゼの中に流れる勇者の血を憎んでいる。

エリーゼは先日、その悪魔信仰者たちに襲われた。彼らをこの町に引き入れたのは、三商会——ビスタ、ソマリオラ、ディアストールのうちのどれかだろう。ビスタ商会の代表とはデザイトスの屋敷で知り合ったが、バグキャットごときに怯える姿を見るに、彼が悪魔信仰者たちを手引きしたとは考えにくい。だから、エリーゼの敵はソマリオラ商会かディアストール商会のどちらかということになる。

エリーゼの敵は他にもいる。異世界から転生し、前世の記憶を持つエリーゼは、精霊——この世界では神にも匹敵する存在に警戒されている。彼らはエリーゼに、精霊の呪いと呼ばれる厄介なものを与えた。

さらにエリーゼは、この国の王子であるタイターリスに束縛され、国を出ることができない。

前世では何者かに殺されたので、今回こそ自由に生きていきたいのに、様々なものにそれを邪魔されていた。

どんな世界にも危険は潜んでいるものだと思うけれど、この世界のそれは、エリーゼの命を常に脅かす。

今、エリーゼの目に映っている迷宮もその一つ。普通に街中まちなかに存在し、それを国に容認されていること自体が信じられないほど危しちめつうい代物だ。

「——迷宮って何なんだろう」

よくないものだというのは、きっと誰もが肌で感じている。迷宮の傍そばには冒険者向けの宿や商店が多く立ち並んでいるが、住居はほとんど存在しない。人を襲う生き物が次から次へと湧き続ける危険な洞穴。その近くに住みたいと思う人は、あまりいないだろう。それでも、人は迷宮の近くに王宮を建てて、貴族はその周りに屋敷を建てて。市民はそれを囲うように家を建て、街が作られる。誰しも迷宮は悪いものだとかわかってはいるが、そこで採れる魔力のこもった石や財宝、魔物の皮などの素材には、抗あひがいがたい魅力があった。

（迷宮って——）

何かを考えかけた時、地面が少しぐらつく。

エリーゼが慌てて屋敷の外に出ると、揺れは収まった。

屋敷の門の前でたむろしている人々が、通りの先を見ている。エリーゼがつられてそちらを見ると、通りの先から一頭の馬が全速力で駆けてきた。門前にいた人々は、慌てた様子で散っていく。

馬は屋敷の前で立ち止まった。興奮して後ろ脚で立ち上がる馬から、一人の青年が振り落とされる。石畳の上に転がった青年——フィンには、起き上がるなり馬を罵倒ばとうし、馬に鼻水を噴きかけられた。それを見たエリーゼは、笑いを必死に堪こらえながら言う。

「……中に入るならどうぞ……？」

「笑うなら、いっそ爆笑してくれ……」

フィンはいつよりも多数段いい身なりをしていた。そのせいで、余計に面白い。エリーゼは腹筋の震えをどうにか抑えて、フィンにこう尋ねた。

「どうしたの？ いつもと様子が違うけど。馬に乗ってるのも初めて見た」

「馬に乗ってきたのは急いでたからだよ。ソマリオラ商会の件がもうすぐ片付く。その総仕上げにエリーゼも参加させてやりたくてさ！」

ソマリオラ商会は、悪魔信仰者たちを手引きしたと疑われる三商会のうちのひとつだ。

フィンはエリーゼの依頼を受けて彼らを調べてくれたのだが、こんなに早く片付くなんて、一体何をしたのである？

フィンは悪戯小僧のように笑うと、エリーゼの手を取って門から引っぱり出す。それに気付いて玄関から出てきたリールが制するのも構わず、フィンはエリーゼを抱えて馬に飛び乗った。

不安定な体勢になったエリーゼは、慌ててフィンに掴まる。

「フィン！ どこに連れてくつもりか知らないけど、安全運転でお願いね!？」

「大丈夫さ、コツは掴んだ……もし落馬したとしても、お前のコトは庇ってやるって!」  
全く信用できないその言葉に顔色を失くしながら、エリーゼは決めた。庇ってくれる  
と言うのだから、万が一の時にはフィンを遠慮なくクッションにしよう。

「姉さん！ ボクもすぐに追いかけますから!!」

そう叫んだリールにエリーゼが手を振ろうとした瞬間、フィンが手綱を強く引く。その  
拍子に馬が後ろ脚だけで立ったので、エリーゼは思わず悲鳴をあげたが、フィンは馬  
を全速力で駆けさせた。

エリーゼが連れていかれたのは、商業区だった。危なっかしい様子で馬を操るフィン  
に、歩いている人々が慌てて道を譲る。

商業ギルドに程近い一軒の屋敷の前で、フィンは馬を止めた。その屋敷から、眼鏡を  
かけた若い女性と、彼女と同じ栗色の髪を持つ青年が出てくる。

「いらつしゃいませ、エリーゼ様」

「……誰？」

涼しげな猫目が特徴的な女性は冷静そのものといった表情で挨拶したが、青年の方は  
エリーゼを見ると驚いたように目を丸くしている。

女性は清楚なワンピースを着ているというのに、どこか勇ましい足どりで一歩進み出  
ると、きびきびとした動作で頭を下げた。

「私はハルア・ソマリオラ。こちらは私の兄で、マルノ・ソマリオラと申します」

それを聞いた瞬間、エリーゼは身構えた。ソマリオラ商会は、エリーゼが特許を持つ  
トランプの利権を掠め取る商会のうちの一つであり、エリーゼの命を脅かした悪魔信仰  
者たちを手引きした可能性もあるからだ。

「フィン……今すぐ結論を教えてください。この街に悪魔信仰者を引き入れたのは、ソマリオラ？  
私は今、敵を目の前にしてるの？」

「違うから落ちつけ」

即座に返ってきたフィンの言葉に、エリーゼは嘆息した。するとハルアが微笑む。

「フィンとエリーゼ様のおかげで、兄マルノがソマリオラの代表に就任することがほぼ  
決定いたしました。そうよね、マルノ兄さん？」

「あ、はい。そうなんです……はい」

妹に前へ押し出された兄マルノは、おどおどした様子でお辞儀する。

「フィンと……私のおかげで？」

身に覚えのない話だったのでエリーゼが聞き返すと、兄よりしっかりした妹のハルアが答えた。

「はい、エリーゼ様。私と兄は前代表ブレッド・ソマリオラの私生児であり、貧民街で暮らしていました」

そのハルアの説明によって、彼女たちとフィンとの関係はおおよそ掴めた。フィンはバタレイで暮らす孤児たちを束ねているのだ。そのフィンがエリーゼに言う。

「前、お前に大金をもらったろ？ その金のおかげで、マルノは前代表を押しつけて新代表の地位にのし上がれるってわけ」

「エリーゼ様、私共ソマリオラ商会はエリーゼ様のために、何かとお役に立てると思います。ですから、これから私共と一緒に商業ギルドに行つてはいただけませんか？ ソマリオラ商会の新代表を決定する会議が開かれるのです」

「私が行くと、何かあるの？」

困惑しながらハルアに問うエリーゼに、フィンは嘆いてみせた。

「つれないぜ、エリーゼ！ こいつらはお前に感謝してるんだって！ 自分たちがブレッド・ソマリオラにやり捨てられた女の子供だって気づく前から、お前のことが大好

きなんだよ！ だからこの記念すべき瞬間を、お前に見てもらいたいんだってさ！」

「ええと……ありがとう？」

「どういたしまして、エリーゼ様。幼少時より密かにお慕っています」

少し年上と思われる同性に、さらりと告白されて、エリーゼはぼかんと口を開けた。

一方のハルアは表情一つ変えていない。

彼女は固まるエリーゼをよそに、数度手を叩いた。すると屋敷の中から、メイドがわらわらと湧き出してくる。

「この先は準備をしながらご説明いたしましょう」

告白の衝撃から覚めやらぬうちに、エリーゼはメイドたちの手によって屋敷の中へ押し込まれた。

昔、フィンの孤児仲間、翌日の天気を正確に予知できる子供がいた。【天気予報】だか【空の友達】だかわからないが、恐らくそういう恩恵の持ち主だったのだろう。

正確な天気予報ができることは、スケジュールを立てるのに、とても役に立つ。だからエリーゼは、それを有効活用させてもらった。エリーゼのアドバイスによって、フィ人たちも天気予報を利用して随分儲けたようだ。

他にもエリーゼは、フィンたちに様々なアドバイスをした。そうしていく中で、フィンたちはこう考えるようになったらしい。自分たちが持っている能力には、価値があるのかもしれない。ならば、それらをどのように使えば利益を生み出すことができるのか——と。

「ソマリオラ家では代々、実力のある子供が当主に選ばれて参りました」

エリーゼの着替えを手伝いながら、ハルアが言った。この兄妹は私生児であるにもかかわらず、大きな商売を成功させたので、兄のマルノが次期代表候補に選ばれたらしい。「父は正妻との間に子がないので、それも辛かったです。他にも子はいませんが、みな妾腹めかけばちです。父と呼ぶだけで吐き気がするあの愚か者おろには正妻も愛想を尽かしておりますし、私共が他の子供たちより商売に向いているのも事実です。——ですが決定打となつたのは、やはりエリーゼ様からいただいたお金を元手にした商売あきなが成功したことですよ。十五歳という若さで正貨をお持ちだなんて、同じ女として憧れてしまいますわ」

ハルアは肌の露出がほとんどないドレスを着たエリーゼに、レースつきの帽子を被せた。顔はほぼそのレースで覆おほわれているので、恐らくエリーゼだとわかる人はいないだろう。

赤いレースの手袋を嵌はめたエリーゼの手を取ると、ハルアは騎士のようにその場に跪ひざまず

いた。

「エリーゼ様は覚えていらっしやらないかもしれませんが、私よりも小さかったエリーゼ様に、算術を教わった時の衝撃は今も忘れられません」

「教えても、ほとんどの子ができなかったけどね」

「はい、私もできませんでした。けれど、中には呑み込みの早い子もいました。そういう子はそれで得た利益を一人占めせず、私たちできない子にも分けてくれました。そのできない子供たちの中から、また別の才能を持つ子が現れ、そのたびに私たちはおこぼれにあずかることができましたのです。それだけではありません。次に才能を見出され、新しい世界に飛び出していけるのは、自分かもしれないと——フィンのもとに集とえば、私たちは夢を見ることができました」

「それって、私とは関係ないんじゃない？」

エリーゼは困った笑みを浮かべて手を引いたが、ハルアはその手をしっかりと掴つかんだまま放さない。エリーゼは小さく溜息を吐いた。

「それに私、自分が欲しいものをフィンに用意してもらうためにやってただけだし」

「存じております」

はつきりと言いつけるハルア。その反応が意外だったので、エリーゼは目を見開いた。

するとハルアは歌うように言う。

「エリーゼ様に私たちを救うつもりなどなかったとしても、私たちが救われた事実は変わりません」

反応に困るエリーゼを見て、ハルアはいっそ淫靡いんぴにも見える笑みを浮かべて囁ささやいた。

「エリーゼ様——私がエリーゼ様に感謝しているということは、すなわち、ソマリオラ商会はエリーゼ様のものだということです。おわかりですか？」

着替えを終えて部屋を出たエリーゼは、扉の外で待っていたリールを見て思わず歓声をあげた。

後を追ってきたリールも、いつの間にか着替えさせられ、髪を黒く染められていたのだ。前世では見慣れていたはずの黒髪が、エリーゼの目にひびく新鮮に映る。リールは染めた頭に緑色の帽子を被り、顔をレースで隠していた。さらに薔薇ばらを象かたどった大きな花飾りで顔の半分が覆おおわれている。刺繍しゅう入りのベストとジャケットを完璧に着こなす姿からは、その顔が見えなくても美少年であることが窺うかがえる。

その横にはフィンと、そして騎士見習いのデーターもいた。

「エリーゼ様が出資者であることが露見してしまうと、エリーゼ様の周辺がうるさくな

るかと思いましたが、こうした衣裳を用意させていただきました。ご迷惑をおかけする可能性があるかわかっても、兄がソマリオラ商会の代表の座につく姿を、エリーゼ様に見ていただき良かったです」

ハルアの声に熱がこもる。エリーゼは彼女の気持ちを想像してみた。

この世界では、ほとんどの仕事は世襲制せしゅうであり、父親から長男に受け継がれる。次男ならば跡継ぎに選ばれる可能性はあるが、三男が家業を継ぐことはほほなく、私生児ともなれば望みはないと言える。だから大抵はデーターのように家を出て、他の職を探すのだ。

その上、ハルアたちは孤児だった。明日食べるのにも苦勞する身の上から、一商会の代表にまで上りつめた——きっと今日という日には、並々ならぬ思い入れがあることだろう。

「本日のエリーゼ様は、名前を伏せて私たちの事業に投資してくださいました、貴族の麗人わいじんということにしています。ですから、どうかご出席くださいませ——エリーゼ様にこの場に立ち会っていたことが、私の長年の夢だったので」

エリーゼは跪ひざまずいて懇願こんがんするハルアから、兄のマルノへと視線を移した。

「ハルアはこう言っているけど、あなたは？」

実際に代表につくのはマルノなのだ。マルノは動揺して一歩後ずさったが、やがてゆつくりとその場に膝をついた。

「……ハルアの言葉が、俺の全てです」

「ハルアは私にソマリオラ商会をくれると言う」

そのエリーゼの言葉に、デューターが息を呑む音が、やけに大きく響いた。

「俺も、ハルアと同じ気持ちです」

マルノは一切の躊躇なくそう言い、ハルアを見やった。ハルアはエリーゼに一礼すると、準備を整えるために動き出す。マルノもその後が続いた。

彼らの忙しそうな後ろ姿を見送るエリーゼの頭に、ふと疑問が湧いてくる。

「……バタレイって、どうしてこんなに優秀な人材が集まっているの？ これは偶然？」

「まさか」

フィンがエリーゼの疑問にあっさりとは答えた。

「親に捨てられた子供なんて、精霊に愛されてでもいねーと生きてらんねーよ。精霊に愛されてなかったら——恩恵を持ってなかったら死んでる。オレらなんて、とっくにな」  
 フィンの言葉に、エリーゼは目を見開いた。フィンにはエリーゼの帽子についたレースを掻き分け、その顔を覗き込みながら苦笑する。

「意外だろうな、お前からすりゃ……お前にとって精霊の恩恵は邪魔なんだから」

言外に自分は違々と主張するフィンに、エリーゼは息を呑む。

「精霊に愛されてりゃ、滅多に病気になるし、怪我もすぐ治る。腹が減っても弱らない。——オレはつい最近まで歯磨きもろくにしてなかったけど、虫歯一つねーんだぜ？」

にとつ笑ってみせたフィンの歯は、確かに頑丈そうで、綺麗に生えそろっていた。

「——確かに、私もあんまり病氣したことない。でも、どうして誰もそのことに気づかないんだろう？ もし気づいてたら、商人とかが放っておかないよね？ 目ぼしい孤児を引き抜いてこき使いたがるはずなのに」

「エリーゼはこの国から出たコトがないからわからないだろうけど、他の国じゃ、正道教<sup>せいどうきょう</sup>つてのが幅を利かせてる。コイツが腹の立つ宗教でさ……生まれが卑しいのは魂<sup>たましい</sup>が卑しいからだつて言うんだ。そんなんだから、神様がオレたちを孤児にしたんだつて。もし精霊の恩恵<sup>キブト</sup>を得ているのに生まれが卑しいヤツがいるとしたら、それは精霊の期待を裏切る大罪人だつて、そう言う」

フィンが唇を噛みしめ、血が溢れ出る。この国で生まれ育つたはずのフィンだが、かつて国外に出て理不尽な屈辱<sup>くつじやく</sup>を味わったことがあるのかもしれない。

口から血が垂れていることに気づくと、フィンは慌てて指で拭<sup>ぬぐ</sup>った。

「つまり、だ。お前が大嫌いな精霊神教会も、オレたちからすりゃ、その……ありがた  
いんだ。あの教会の教区でなら、大聖堂に入るのも許されるしな。だから——ハルアた  
ちを怒らないでやってくれ。アイツらは、お前と精霊神教の確執を知らないんだよ」

「……何が言いたいのか？ フィン」

「アイツら、精霊神教の教徒なんだよ。お前にやめろって言われたら、ハルアはすぐや  
めそうだけどな」

半眼でフィンを見やりながら、エリーゼは呟いた。

「……そのことを事前に聞いてたら、会議に出るかどうかもう少し考えた」

「だから言わなかったんだ」

エリーゼが歯を剥き出しにして威嚇すると、フィンがそれを隠すように、エリーゼの  
帽子のレースを下ろす。

「ハルアはお前のコト、ホントに好きなんだって。だから出てやれよ、な？」

「……私の意思一つで、精霊神教会から信徒を奪えるの？」

「コワイって、エリーゼ」

「アスピルから信者を一人奪い取る——成功したら気分よさそう」

俄然気合の入ったエリーゼが、ドレス姿で準備運動をする。それを見たフィンは笑った。

「精霊神教を潰すなら、責任もって正道教の対抗宗教を作ってくれよ」

「それは無茶ぶりすぎるでしょ」

精霊神教に対して好感を抱いているようなことを言っておきながら、潰れた時を笑顔  
で想像するフィン。それを見て彼に対する不信任が薄れたエリーゼは、その冗談に笑った。

そう、冗談だと思った。あまりに壮大な話だったから。

（——だけど、本当に精霊神教会を潰すことができるなら……）

あの宗教は魔族を嫌悪しており、魔族を家族に持つエリーゼにとって相容れる余地は  
ない。そして、あの宗教が存在している限り、魔族であるリールは命を狙われ続ける——

馬車に乗せられたエリーゼは、とある用事を済ませるため一度大聖堂に寄ってもらい、  
その後商業ギルドへ向かった。

商業ギルドの館にたどりついたエリーゼたちは、明らかに浮いていた。だが、顔が隠  
れているからエリーゼは気が楽だった。

フィンが堂々たる足どりで中へ入っていくので、エリーゼたちはそれについていく。  
ソマリオラ商会のために貸し出されている会議室につくと、部屋の外で何事かを話して  
いた商人風の青年たちが、エリーゼたちを見て目を丸くした。

フィンが会議室の扉を開けてくれたので、エリーゼを先頭にして中へ入り、リールとデイータがその後続く。啞然とする人々の顔を見て、エリーゼはレースの陰で苦笑した。彼らが啞然とするのも無理はない。それぐらい派手な格好なのだ。

「こちらへ」

フィンは当たり前のようにエリーゼを上座へ誘導した。視界の悪いエリーゼの手を、同じく視界が悪いはずのリールが、事もなげに引く。

椅子に腰かけると、部屋全体が見渡せた。レース越しだからはっきりとは見えないが、一番若そうな出席者でもハルアたちより年上に見える。

近くに座っている初老の男がエリーゼに問いかけてきた。

「あなたたちは——？」

「マルノ殿の支援者です」

「へえ。わざわざお越しいただいたようですがね、まだマルノが後継者になると決まったわけではありませんよ。あなたたちにとつては、残念な結果になるかもしれません」  
 やっぱり、すんなり決まるわけではないらしい。だが、ハルアとマルノは孤児でありながら、この継承会議を開催するまでにこぎつけた。だから心配することはないだろうと思いつつ、エリーゼは会議室を見回す。

しばらくすると、誰かの舌打ちが密やかとは言い難い音量で部屋に響いた。

「——ちっ、ハルアたちがきた！ 奥方様と一緒に来やがった！」

奥方様というのは、恐らく前代表の奥さんだろう。ハルアたちと一緒に入ってきたその女性は、エリーゼが思っていたより若くて美しかった。女性は部屋に入るなり、優しげな容貌を悲しそうに歪めて言う。

「この子たちに刺客を差し向けたのは誰です？」

その言葉に、エリーゼたちの近くに座る初老の男が答える。

「彼らが命を狙われたとしたら、それは彼ら自身の生い立ちが原因でしょうね。あー、バターレイ、でしたかな？ そのような卑しい場所で育ったということですから——」

ばちん、とエリーゼの手の中から音が鳴り、初老の男は口を噤んだ。男の発言に神経を逆撫でされたエリーゼは、無意識のうちに扇子をぎりぎり握りしめていたらしい。

リールが宥めるように、エリーゼの肩に手を置いた。嫌味な初老の男は、興を削がれた様子で言う。

「——このたび我が方がソマリオラ商会に並々ならぬ投資をしていただいた貴婦人に、どうやら退屈な思いをさせてしまったようですな。そろそろ会議を始めませんか？」

「ええ、そうしましょう。もう無益な言い争いはたくさんです」

奥方様と呼ばれた女性は、うんざりしたように言うのと、入り口に近い下座の席につく。ハルアは迷いなくエリーゼに近づいてきて、隣に座った。マルノはその隣に座る。ディータとフィンはともかく、リールが立ったままなのが気になり、エリーゼはそちらに視線をやった。だが、リールに無言で頭を正面に戻される。

全員が席に着くと、ハルアが机に手をつき立ち上がった。

「前回の会議にて、私たちの功績がソマリオラ商会の歴史の中でも類を見ないほど偉大なものであると、皆さんに満場一致で認めていただきました。実力主義を標榜するソマリオラ商会において、それはすなわち、後継者の決定を意味します。ソマリオラ商会の運営にかかわるあらゆる権利を、仮代表である奥方様より、兄マルノに移譲していただくということです。何か異論はありますか？」

「あるに決まっているだろう！」

声を荒らげたのは、喧嘩っ早そうな青年だった。ハルアは顔色一つ変えずに切り返す。「それはつまり、私とマルノを上回る功績を、あなたが過去に上げている、ということでしょうか？」

青年は、うっと詰まった。するとハルアは早口で畳みかける。

「それとも、これから出る？ 近いうちに出る？ ——まさかとは思いますが、ソマリ

オラ商会の実力主義に対する批判でしょうか？ 子供たちの中で生まれたのが一番早いのは自分だから、自分が跡継ぎに相応しいとでも？」

「違う！」

青年は、机にのせた拳をぶるぶると震わせている。ハルアはそれを見慣れている様子だった。恐らくこういったやり取りを、彼らは何度も繰り返しているのだろう。

「そもそも、お前たちが親父の子供である証拠はない！」

「私たちが父の実の子であることは、調べがついています」

「何をどう調べた？ 奥方様は、お前たちが失踪した乳姉妹にそっくりだというだけで、お前たちをその乳姉妹と親父の間に生まれた子だと思っ込んでいる！ そんなのは証拠にならないんだよ！」

青年はにやりと笑う。その表情を見据えるハルアは、依然として冷静だった。

「奥方様の乳母——つまり私たちの祖母が証言してくれませう。マルノ、おぼあちゃん連れてきて」

「なっ……乳母は死んだはずじゃ!？」

「生きています。……何者かに殺されかけましたが」

その言葉に人々がざわつく中、ハルアたちの祖母らしき女性が、歳の割にしゃんと背

筋を伸ばして部屋に入ってきた。それを見て人々がヒソヒソと囁き合う様子からは、死んだはずの人間が生きていたことに対する喜びや感動が感じられない。

魔族がいるハイワーズ家よりも、この家の方がよっぽど殺伐としていっている。エリーゼは辟易して、背もたれに身体を預けた。

「マルノは確かに旦那様の子供でしようよ……うちの娘は臨月になると逃げるように帰ってきて、奥方様に申し訳ないと泣きながら、マルノを産み落としたのですからね……」  
 ハルアたちの母は、望んで妊娠したわけではなかったのだらう。ハルアたちの父に対する印象は悪くなるばかりだ。たとえハルアたちが彼の実子でなかるうとも、ソマリオラ商会を乗っ取ることに罪悪感を覚える必要はなさそうだった。

「あの子はマルノを産むと、お屋敷に戻ったんですよ。私にマルノを託してね。だけど、私はマルノを育てる気にはなれなかった……望んでもお子を授けられない奥方様に申し訳なくて、教会に捨ててしまいましたよ」

「ここにいるマルノが、本当にその赤子なのかどうかはわからない！」

青年が鬼の首を取ったように叫んだ。すると、ハルアが再び口を開く。

「次に、教会でマルノを拾った者の証言です。どうぞ入ってきてください」

ハルアは妙に丁寧な口調で、次なる証人を招いた。

そして部屋に入ってきたのは、エリーゼも知る人間だった。

「お初にお目にかかります——アーハザンタス精霊神教会の聖女、ヴィルヘルミナと申します」

萌黄色の髪と目は神秘的なのに、どこか生々しく、俗世に生きる女性であることを感じさせる聖女。エリーゼの手の中で大きな音がしたかと思うと、扇子がばらばらになってドレスの上を滑り落ちていく。どうやらまた無意識に強く握りしめていたらしい。データーが落ちた扇子の破片を素早く拾って隠した。

エリーゼはハルアを見やったが、ハルアの方はエリーゼの視線に気づかない。エリーゼは舌打ちしたくなった。

「私が拾って孤児院に入れてやった子が、ここにいるマルノで間違いないありません」

ヴィルヘルミナはにっこりと笑って、ハルアたちのために証言した。

反論できずにいる青年の代わりに、先程の初老の男がヴィルヘルミナを睨みつけて言う。

「赤ん坊がすり替えられている可能性は？」

「誰が何のためにそんなことを？」

「ソマリオラ商会代表の血を引く子ですよ？ いずれ何かに使えると思ったのでは？」

「そういった世俗せぞくのことは、私にはよくわかりませんが……孤児院には時間がある限り訪れて、子供たちの面倒を見てきました。彼らの顔を見間違えるなんてありえませんか」  
 ヴィルヘルミナは室内に漂ただよう険悪な空気をものともせず、穏やかな笑みを浮かべて続ける。

「妹のハルアを身ごもって実家に戻った際、マルノが捨てられたことを知ったお母さまは、半狂乱で私のもとを訪れました。まさに母性の権化けんげでしたわ。精霊神せいれいじんの御加護はあいう方にこそ与えられるべきですね。彼女は孤児院からマルノを連れ出し、バターレイ近くの貧民街で二人を育てることを決心なさいました。私もよく相談に乗らせていただきましたわ。彼女が流行はやり病やまいで亡くなってしまうまで——」

エリーゼはその痛ましい話に、無表情で耳を傾けた。マルノとハルアは幼い頃に母親を亡くし、精霊神教会に頼って生きていたという。そんな二人にとつて、ヴィルヘルミナは母親代わりと言ってもいい存在なのではないだろうか。

（二人は私とヴィルヘルミナ、どっちを選ぶかな）

エリーゼのために動いてくれると言った矢先には、ハルアはエリーゼに反旗はんきを翻ひるがえし、ヴィルヘルミナの命令でリールを殺しに来るかもしれない。

初老の男が脂汗あぶらあせをかきながらも、再び口を開く。

「私としては妖精との交易ルートを開拓した時点で、君たちを次期代表に推おし進すすめたいと思っていたよ。ディアストール商会がほぼ独占していた魔法薬のシェアを、君たちのおかげでほとんど奪うことができたんだから。だが、これほどの利益を上げられたのは、たまたま出資者がいたからだろうか？ 今後は人の力を借りるなどは言わないが——君たち自身には一体何ができるのかな？ 私はその知りたい」

「商会のさらなる繁栄に寄与できます。具体的な方策としては、貧民街に埋もれている才能を見つけ出し——」

「貧民街!? 卑劣な魂たましいを持つ大罪人を、歴史あるソマリオラ商会で働かせるといえるのか?」

「そんなことをすれば、ソマリオラが神に見放されてしまう!」  
 口々に言い放たれる差別的な言葉に、マルノが顔を歪ゆがめる。ハルアは冷静な声音で落ちつくよう呼び掛けたが、人々の反発が収まる気配はない。

そこでエリーゼが立ち上がると、室内はしんと静まり返った。エリーゼの身分を明かしていないから、かなり位のくわい高い貴族とも思っているのかもしれない。

エリーゼは姉のカロリーナを意識して声音を変え、こう言った。

「あなたたちには、言い争っている暇などないはずだ。先日ソマリオラ商会は、トラ

ンプの販売を禁止されました。あなたたちはトランプの代わりになるものを、すぐにも見つけなくてはなりません」

エリーゼは机の上に転がされていた、掌大の水晶玉を見やる。それはソマリオラ商会がこの会議のために商業ギルドから貸してもらった精霊の御代だ。新代表はこれを使って、仮代表である奥さんから全ての権限を譲渡してもらおうのだ。

商業ギルドの御代を使って特許の申請をすることはできないが、特許の確認をするとは可能だった。

エリーゼはその御代に触れ、目の前に展開された立体映像を指で操る。そして部屋中を見回し、低い声で、秘密を告げるかのように言う。

「私、この新しく申請された【リバーシ】という玩具の作者とお友達なの」

そう言うって、特許の登録画面が表示された水晶玉を、机の上に転がす。

実はこんなこともあるうかと、ここへ来る途中で新たな玩具——リバーシの特許を申請しておいたのだ。だが、申請した本人だと言うと面倒くさいことになりそうだから、とりあえず友達ということにした。

出席者たちが水晶玉を覗き込み、リバーシとはどのような玩具なのかを確かめようとする中で、ハルアだけがエリーゼを見つめていた。

——そして五分後には、全員がマルノを新代表として認めた。

会議が終わるや否や、エリーゼはリールに腕を掴まれ、そのまま引っぱられる。エリーゼがドレスの裾を踏んで転びかけると、リールはようやく歩みを緩めた。

リールの表情は、レースで隠されているのでわからない。商業ギルドの裏にはいくつもの馬車が停まっついていて、後ろから追いついたフィンが御者に発車の準備を急ぐよう指示した。

エリーゼたちを追ってきたソマリオラの関係者たちが、大声をあげる。

「リバーシの話を、もっと詳しく聞かせてください！」

それにはハルアが答えた。

「——リバーシについては、私たちがお話を伺っておりますので、ご心配なく。あなたたちは今すぐそれぞれの店に戻り、開発部長の指揮のもと、リバーシの生産準備をお願いします。——美しい方、それでよろしいでしょうか？」

リールによって馬車に引っぱり込まれながらも、エリーゼはハルアを振り返って頷いた。

ハルアたち兄妹は馬車をギルドから借りて、それに乗り込む。

商業ギルド近くにある屋敷に戻ると、リールは玄関ホールでレースの帽子を脱ぎ捨てた。

「姉さん！ リバーシとは何のことですか!? 姉さんに友達なんていないでしょう!」

「えっ?! い、いなくはないよ!」

「では誰です?」

答えに窮したエリーゼは、ハルアの後ろに逃げ込んだ。そんなエリーゼを蕩けそうなほど熱い眼差しで見つめながら、ハルアはその手を取る。

「あの玩具はきつと売れるでしょう。エリーゼ様の人脈と慧眼には、本当に驚かされます。——ほら、私の胸の鼓動をお聞きください。今にも飛び出してしまいそうなほど高鳴っているのが、わかりますか?」

ハルアはエリーゼの手を自身の胸に押し当てる。ハルアが言う通り、彼女の心臓は早鐘を打っていた。顔は涼しげなのに、身体は熱があるのかと思うほど熱い。

「エリーゼ様のおかげで、私共は速やかに代表の座に収まることができました。——エリーゼ様、私共にどのようなものをお求めですか?」

ハルアは、エリーゼには何かしらの魂胆があると見透かしていたらしい。

エリーゼはハルアの胸を掴んだ。これからエリーゼが口にする言葉を聞いて、ハルア

の心臓がどのように動くかを知れば、彼女の本音がわかるだろう。

ハルアは胸を掴まれた瞬間、妙に色っぽい声をあげたが、エリーゼにされるがままになつていた。エリーゼは冷静な目で彼女を見据えて口を開く。

「私とヴィルヘルミナ、どっちが好き?」

「——エリーゼ様?」

「精霊神教会を潰したいんだけど、協力してくれる?」

ハルアが目を見開いて固まる。鼓動は一度大きく打ったが、その後は静かだった。

エリーゼは眉を顰める。

「比べるまでもありません。エリーゼ様をお慕いしております」

「そう? お母さんは困ったことがあれば、ヴィルヘルミナに相談していたんでしょ? あなたたちにとつても、育ての親みたいなものじゃないの?」

「母が私が三歳の時に亡くなり、それ以来、私はあの聖女とほとんど言葉を交わしたことはありません。それ以前に会ったことがあるかどうか、覚えていません。私は小さかったのです」

「……ん?」

エリーゼは首を傾げた。

「でも困った時には、頼っていたんだよね？」  
 「はい。食べるものがなくて困った時には、教会に行き、食糧を恵んでもらっていましたが、ですが、マルノを拾って孤児院に入れてくれたのは、あの聖女でも教会の方でもなく、見知らぬ人のようですよ？」  
 「どういうこと？」

「聖女ヴィルヘルミナは、聖職者の割に話のわかる方なんです。お金と……持っている恩恵の質や数によっては、お恵みを他の子よりも多めにくれるのです。——嘘だって吐いてくれる」

エリーゼは啞然とした。どうやらヴィルヘルミナは、ハルアたちのために嘘を吐いたらしい。

「——ハルアが恩恵をたくさん持っているから、手助けしてくれたってこと？」

「いいえ、私は恩恵を持っていません」

そのハルアの言葉に、エリーゼはきよんとした。ハルアは肩を竦めて苦笑する。

「しかも、兄に比べると身体が弱くて……生きることだけでも大変でした。私が今日まで生きていられたのも、ここまでのし上がれたのも、全ては兄のおかげです」

「マルノには恩恵があるの？」

「はい。十個もあるんです。二桁もの恩恵を持っているのは本当に珍しいそうで、聖女ヴィルヘルミナは兄のために様々な便宜を図ってくれました」

エリーゼは顔を顰めた。それは精霊に愛されている勇者——兄ステファンと聖女の關係と同じだったからだ。

「なるほどね。精霊神が大好きな聖女は、精霊に愛されてる人を鼻屑する、ってことか」  
 「その通り。確かに精霊神教会には感謝していますし、献金もします。ですが、エリーゼ様が教会を滅ぼせとお命じになるのなら、私の全てを賭して尽力いたします。手始めに、聖女ヴィルヘルミナを暗殺いたしましたでしょうか？」

「えっ!? いや、それはしなくていいよ」

平然と過激な発言をするハルアを、エリーゼが慌てて止める。そんなエリーゼの顔を見つめながら、ハルアは恍惚とした表情で言った。

「ふふ。エリーゼ様をお慕いしていると申し上げましたのに、私が精霊神教会を選ぶとお思いなのですか？ まさか嫉妬なさっているとか？ お可愛らしいこと」

「いや……嫉妬っていうか」

エリーゼは、ハルアの胸からそっと手を離す。この様子だと、ハルアは信用してもよさそうだ。

そこで、【**気配察知**】の恩恵キョウトを持つエリーゼは、誰かの剣呑けんおんな視線に気づいた。エリーゼがそちらを見やると、エリーゼを睨にらんでいたマルノが慌うろたてて俯うつむく。

エリーゼは彼を睨み返した。

「ハルア、あなたの兄は、あなたとは違うかもしれない」

「ご心配には及びません……兄さん、エリーゼ様にギルドカードをお見せして」

「いや、ハルア、これはあまり人に見せない方が——」

「マルノ兄さん」

「——はい」

マルノは腰に帯びていたポーチから渋々しぶしぶカードを取り出し、エリーゼに渡した。そこにはぼつんと一つだけ、恩恵キョウトらしきものが書かれている。

【**妹思い**】？

「——兄さん、全部お見せして」

「うう……あの聖女にハルアの薬を融通ゆうずうしてもらう必要がなければ、生涯隠し通しておきたかったのに……」

「マルノ兄さん、お願い」

ハルノに再三頼まれ、マルノは呻うなきながら、エリーゼが手にしているカードにちよい

と触れた。そこに羅列された文字を見て、エリーゼは目を丸くする。

【**妹思い**】 【**妹が好き**】 【**妹に弱い**】 【**妹への恋**】 【**妹への愛**】 【**妹の虜**】 【**妹のためなら**】

【**妹命**】 【**妹万歳**】 【**妹至上主義**】

「ひっ」

悲鳴に近い声をあげて、エリーゼはギルドカードを床に叩きつけた。マルノはどんよりとした表情でそれを拾うと、そそくさとポーチにしまい込む。

「私の愚兄ぐけいは、私の意に沿わぬことはしません。エリーゼ様のご不興を買うことはないでしょう。改めて、私たちの忠誠心をご理解いただけましたか？」

「そうだね……ハルアの私への忠誠心と……マルノのハルアへの忠誠心……嫌というほど……」

遠い目をするエリーゼを見て、笑みを浮かべるハルア。そんな彼女から、リールがエリーゼを奪い取る。そして鋭い口調でエリーゼを問い質した。

「それで？ リバーシとは何です？ まさか口から出まかせというわけではありませんよね？」

「まあ、正直に言うくと、友達じゃなくて私が登録したもののなんだけけど」  
興奮して歓声をあげかけたハルアを、リールが目で黙らせた。

「姉さん、どうして? どうしてなんですか。次から次へと! どうして、どうして!?!」

急に声を荒らげるリールに、エリーゼは戸惑った。

「その、正確には、私が思いついたものじゃないの。他の人が思いついたもので……でも、それを誰も特許申請しないから、それならと思つて私が——」

「他の人って誰ですか?」

「誰って、それは……」

口を噤んだエリーゼを見て、リールは歯を食いしばる。エリーゼの二の腕を掴む手が、力を入れすぎて震えている。少し痛かったが、エリーゼはやめてと言えなかった。

「……どうしたの? リール」

「誰、なんですか……」

優しく尋ねるエリーゼに、リールがか細い声で答える。その声も震えていた。

リールが泣いてしまうのではないかと心配になり、エリーゼはレースのついた帽子を脱いで、その顔を覗き込む。その瞳には涙が浮かんでいた。

「リ——」

「誰にいじめられていたんです?」

「え……いじめ?」

「シーザが毒を飲んで倒れた時、姉さんは言いましたよね? 前にもいじめられたことがある。だから懐かしいって。それに、シーザが暴言を吐いた時、まだ叱ってくれる人がいてくれて嬉しいとも言っていました。一体誰に叱られたことがあるんですか? ボクは知らない。聞いたこともない。ボクは姉さんの傍にずっといたのに——知らないなんてありえないのに!」

エリーゼが何かを言おうとする前に、リールが叩きつけるような口調で言った。

「リバーシとやらを姉さんに教えたのは誰ですか!? 友達って誰ですか!? いるんでしよう? ボクには言えないみたいですけど」

「そ、そんなことないよ」

「姉さん、誤魔化すなら、どうかもっと上手くやってください」

リールはエリーゼを睨みつけながら泣いている。

「りー、る」

エリーゼの声も、涙で濁っていた。頬を伝う涙を、エリーゼは慌てて拭う。リールが

泣いている理由はわかるが、自分が泣いている理由はわからなかった。

震えながら泣くエリーゼを見下ろして、リールも自身の頬を流れる涙を拭う。

「——やっぱり口を割りませんか」

その声があまりにもけろりとしていたので、エリーゼは啞然とした。

「何を隠しているんだか知りませんが、どうやらボクが思っていたより深刻なようですから、話さなくていいです」

「……え？」

「え？　じゃありません。ボクが泣きまでしたのに、変なところで強情なんですから」

大きく溜息を吐くリールの横で、ハルアが「泣き落としです」と呟いた。

「な、泣き落とし？」

「姉さんに秘密が多すぎて、いい加減うんざりしていたので」

「そ、それで泣いたの？　私、すごく心配したのに！」

「お互いに、姉妹思いの兄弟には苦勞させられますね」

エリーゼはハルアの言葉に驚きつつ、否定した。

「え？　いや、うちのリールはそんなじゃないから」

「身内の恥を隠したい気持ちはわかりますが、リール様は成人していませんし、エリー

ゼ様より年下ですから、まだ許されると思います」

「許されるとか、そういう問題じゃなくて——」

「姉妹の友人関係を全て把握していないと気が済まない兄弟なんて、私はマルノとリール様以外に見たことはありません」

エリーゼは努めて苦笑を浮かべたが、鳥肌は隠せなかった。

そんなエリーゼの反応にくすりと笑った後、ハルアはエリーゼを上目遣いに見て言う。

「詮索はいたしません、これだけは言わせてください。エリーゼ様とお友達になりたいのですが……お嫌ですか？」

「——っ、ううん！」

喜色満面で答えるエリーゼに、ハルアは照れ笑いをしてみせた。

## 第二章 寵愛の印

とにかく平穏な生活を送りたい。そのためには、問題を一つずつ片付けなくてはならない。

エリーゼは何から片付ければいいのか途方に暮れつつ、とりあえずレベルアップのために迷宮にでも行こうと準備をしていた。

ちょうどその時、屋敷の前に馬車が停まった。窓に貼り付けられた銅板はバターレイの各勢力の目印であり、その意味を知る人たちは、蜘蛛の子を散らすように去っていく。馬車はリールが呼んだものらしく、彼がそれに乗り込もうとするのが見えた。

エリーゼが屋敷を出てそちらへ向かうと、当たり前のような顔をしてディータがついてくる。

「リール、バターレイに行くの?」

「ええ。タイタリスが妃候補である姉さんを手放すとは思えないので、この国の守護精霊から逃れる方法をフィンに探させていたんです。あまり期待はしていませんでした

が……解決の糸口は掴んだと思います」

「糸口?」

「妖精です。フィンが交渉して、会わせてくれることになったんですよ。妖精は嗜好きで物知りですし、人間の三倍は長生きしますからね。色々知っているそうですよ、精霊についても——この国の守護精霊についても」

それを聞いて、エリーゼは顔を輝かせた。

「ありがとうリール! 妖精万歳!」

「姉さんが嬉しそうで何よりですが、目的は忘れないでくださいよ」

エリーゼは大きく頷いて馬車に乗った。向かいに座ったディータが嘆息する。

「正貨にリバーシ、ソマリオラ商会の次は、妖精ですか。何がどうなっているのかわかりませんが……あなた方がすごいということだけはわかりますよ」

「すごいかなあ?」

「さあ? 単にディータがこれまで生きていた世界が狭かっただけではありませんか?」

「確かに。返す言葉ありません」

息を吐くディータを見て、エリーゼはくすくすと笑う。

そうしているうちに、エリーゼたちを乗せた馬車は貧民街のバターレイへと入って

いった。銅版が打ちつけられているので窓の外は見えないが、整備されていないガタガタの石畳に乗り上げた衝撃で、バターレイに着いたことがわかる。

エリーゼが馬車から降りると、すぐに迎えが来た。

「エリーゼさん、こっちー！」

「はい」

「……あの少女には見覚えがあります。まあ信用してもいいでしょう」

迎えに来た少女——リリを見て、リールはそう言う。リリは顔を擧めて溜息を吐くと、小走りで駆けていく。エリーゼたちも後に続いて走った。

リリは寂れた教会の地下室へとエリーゼたちを案内した。そこにお目当ての生き物を見つけて、エリーゼは飛びつきたくなるのをぐっと堪える。

綺麗な緑の髪をした七歳くらいの女の子がソファに座っていた。燭台に火を灯しただけの薄暗い地下室の中、その白い肌が淡く発光している。灰色のローブを身につけているので、その背中にあるはずの羽根は見えなかった。

「来たか、エリーゼ」

けられらと笑うフィンは、慣れた様子で妖精の前に座っている。

「フィン……！ 妖精……！」

「嬉しそうだなあ、オイ」

エリーゼは逸る気持ちを抑えつつ、まずはフィンに近づいた。そしてフィン肩越しに、興味津々な眼差しを妖精に向ける。すると妖精の女の子は、少し居心地が悪そうに俯いた。

「……あまり見ないで」

エリーゼは声にならない歓声をあげた。妖精の女の子は声も可愛らしかった。古代語を話しているのは、それが普段使っている言葉だからだろう。

二つの意味を同時に伝える古代語。それをリール以外の誰かが正確に使うの聞いたのは初めてで、エリーゼは嬉しくなった。

「ごめんね」

「言葉が話せるの？」

「うん！ 初めまして！」

「よろしく……。人間には珍しい」

妖精の女の子はエリーゼも古代語を話せることがわかると、途端に友好的になった。エリーゼは照れながら自己紹介する。

「エリーゼ……私の名前！」

「私は風の妖精」

「ああ……妖精は自分の名前を他人には教えないんだっけ」

エリーゼは思わず普通語で呟いたが、妖精の女の子は頷いた。どうやら普通語もわかるらしい。けれど、普段使っている言葉の方が話しやすいだろうと思い、エリーゼは古代語で尋ねた。

「名前を呼ばれると、魂が縛られちゃうんだよね？」

「名は体を示す。捕まったら逃げられない」

「大変だねえ」

「人間ほどじゃない。その代わりに寿命が長い。魔法も得意」

「なるほどね……」

エリーゼは本で読んだことがある。妖精の中でも薄い羽根を持ち、見た目より軽い身体を持つフェアリーという種族は、精霊に近い生き物なのだという。逆に人間に近いのは、エルフやドワーフ、羽根を持たない小人といった種族だとか。

フェアリーは精霊と違って目撃例がそれなりにあるもの、滅多にお目にかかれない種族だ。名前を呼ばれただけで逃げられなくなってしまうほど弱いから、普段は隠れて暮らしている。

今度は妖精がエリーゼに問いかけてくる。

「あなたも縛られている？ そう聞いた。この国の古い精霊から逃げたいの？」

「うん。今すぐ逃げたい。自由になりたい」

「気持ちわかる」

妖精は人間に捕獲されては、売買されると聞く。それを思うと、妖精がバターレイのような危険な街にいるのは正気の沙汰とは思えなかった。

「ここにいたらあなたも危ないよ」

「子供にしか会わないから大丈夫」

「……フィンも私も子供じゃないけど？」

そこでフィンが口を挟む。

「成人してるとかしてないとか、そういう意味じゃないってコトだろ？ ……って、なんでそんな目で見んだよ!?」

風の妖精が身を竦めて、フィンをねめつけた。

「大人……なの？」

「オレは永遠に子供だよ！」

「それはそれで……ねえ」

「うるっせえなあババア……」  
「ババアじゃない！」

「泣き真似すんなよ。百歳越えてんだから、人間からしてみりや老婆だっつの」

泣き真似をする風の妖精と、それを呆れた目で見るフィン。二人はある種の信頼関係にあるらしい。エリーゼは少し驚きながら妖精に質問する。

「私はどうしたらいい？」

「……確かこの国の精霊は、千年くらい前からここを守ってる」

「千年前っていうと、ちょうど母上が勇者をしていた頃ですわね——」

「勇者の子!? わからなかった！ 握手して！」

風の妖精はリールの手を取り、無理やり握手した。するとリールの手に光の粉がつく。嫌そうな顔をしてロープで拭おうとするリールを見て、エリーゼは首を横にぶんぶん振った。

羨ましさのあまり、リールの姉だと自己申告したエリーゼの手も、風の妖精はぎゅつと握った。エリーゼはさらさらの粉を零さないよう、こっそり鞆に入れておく。

「私は勇者の子の味方だよ！ なんでも聞いて！ 守護精霊のことが知りたいの？ 精霊は人と共にいるとどんどん薄くなる」

「ボケる？」

「人間で言うなら。精霊は老いない。でもだんだん薄くなって、やがて消える」

風の妖精曰く、それが精霊の死を意味するという。ジスという名の守護精霊は、人間と共に生きてきたから、普通より早く薄くなっているそうだ。そして薄くなると、人間という「ボケた」状態になるらしい。

「もうすぐその精霊が死んで、私は解放される？」

「それは流石にない。あなたよりは長生き。でもかなり薄い。誰を守っているのかもわからなくなってる」

風の妖精が、ジスを憐れむように眉を擡めた。

「ジスに誤解させればいい。あなたが守るべき立場の人間だと。多分王家にその方法が伝わってる」

「それが何かは……」

「わからない」

「だよー」

エリーゼは溜息を吐きかけたが、ふとあることに気付いてそれを呑み込んだ。精霊の死などという概念は、そもそも聞いたことがない。これはすごい情報だろう。

精霊神教会の前の聖女シルフローネが、そのことを知ったら——

（きつと大変なことになる……。うわあ……。すごいこと聞いちゃった……）

くいと腕を引かれて、エリーゼは顔を上げる。いつの間にか風の妖精が、考え込むエリーゼの傍に寄ってきていた。妖精は緑色の目で、上目遣いに見つめてくる。

「役に立った？」

「多分ね」

エリーゼの言葉に、風の妖精はにっこりした。

「お礼をちょうだい！」

「え？ 髪の毛？」

きよんとするエリーゼに、風の妖精がさらに近づく。それをリールが手で制した。

「何に使うつもりですか？ 怪しい魔法薬が何かを作るとか？」

「うん！ リーみんなに教えるの！ あなたもくれる？」

無邪気な子供のように振る舞う妖精を見て、リールは鼻に皺を寄せた。

「嫌ですよ……。って、姉さん!？」

エリーゼは自分の髪を一房、短剣で切り取った。それを笑顔で風の妖精に差し出す。妖精はエリーゼの髪をロープの中にそっとしまい、嬉しそうにはしゃいだ。とても百

歳を越えるご老体には見えない。

「里に帰って自慢する！ もう帰っていい？」

風の妖精が鞆を持ち上げると、光る鱗粉がさらさらと落ちてソファに溜まった。それをエリーゼがわくわくした目で見つめていたら、風の妖精の方もわくわくした顔をして、ふつと消えた。

目をぱちくりさせるエリーゼの横で、リールが冷静な声で分析する。

「空間魔法を使ったようですが、呪文を言わなかったところを見ると、妖精特有の魔法でしょうか？」

「それより、妖精の粉がいっぱい！」

「……その粉を身体にかけても、空を飛べたりはしませんよ」

「えっ、なんで知ってるの!? リールにピーターパンの話したっけ？」

「ええ。大昔に」

リールに掌を拭われて、エリーゼはふくれ面をした。

エリーゼたちはこの国を脱出するための作戦を立てるべく、一つの机を取り囲んだ。

「とはいえ、フィンたちにしてもらえることなんて、もう何にもない気がするけどね……」

「そんなコトねーよ。例えば、後宮から逃げ出した女がどうなったか聞きたくねーか？」

「実際にそんなことした人がいるの？」

エリーゼは目を丸くした。妃候補が後宮から逃げ出したということは、つまりアールジス王国に逆らったということだ。さらに言えば、この国の守護精霊に逆らったということでもある。

「つい一週間くらい前の話だけだな。精霊と交わった女の末裔が暮らしてると言われている村から、王子の指示で後宮に連れてこられた女がいたんだ。その女は、村に恋人がいたらしくてさ。その恋人に説得されて、後宮から逃げるコトを決意したらしい」

「よく決意したね…：恐くなかったのかな？」

「国に逆らうんだから、そりゃ恐かっただろうが、妃候補が国から出られないようになってるコトは知らなかったみたいだな。国を出る手引きをしてくれているから、オレらは引き受けた。この国から出れば守護精霊の支配から逃れて、好きな男とも触れ合えると思込んでたから、女のお目はキラキラ輝いてたよ。だけど、女は王都から離れるにつれ——衰弱していった」

恐らく、フィンが彼らを誑かして実験したのでだろうとエリーゼは予想した。だから話の雲行きが怪しくなってきたのを感じて、思わず眉を寄せる。

フィンはそんなエリーゼの反応を気にすることなく続けた。

「そもでもって、国境に近づくと、足がさらにおかしくなってきた。よく観察してみるとだな、脛の半ばから下が、勝手に痣だらけになっていくんだよ」

背中がぞわりとして、エリーゼはソファの上に足を乗せた。足を摩ってそのぞわぞわを消そうとしたが、いくら摩っても悪寒はなくなるらない。

「恋人の男はな、この国を出さえずれば治ると思つたらしい。か細い声で足の痛みを訴える女を抱き上げて、強行突破しようとしたんだ。——この国から出た途端、女の足はなくなった。だが、命まで取られたワケじゃない。国と精霊に逆らった罰がこの程度なら、まだマシなんじゃねえ？ 今頃はどっかの国で幸せに暮らしてるだろ。……まあそいつらはラッキーだっただけで、必ずしも命が助かるワケじゃねーから、オススメはできねーケド」

どうやらフィンは、二組以上の男女を使って実験しようだ。

「助かる人と、助からない人がいる……？」

「ああ。オレはエリーゼなら少なくとも命は助かると思うけどな」

「どうして？」

「——精霊に愛されてるから」